

人文学会に期待するもの

三星 宗雄

神奈川大学人文学会設立六〇周年、おめでとうございます。私どもが運営委員として学会の運営に関わったのがちょうど一〇年前の、五〇周年の時でしたので、時間の経過を感じます。一昔前になってしまいました。

またこの栄えある節目に執筆の機会を与えていただき有難うございます。一〇年前の活動の軌跡を辿りつつ、現在の学会の印象と今後の学会への期待を込めて、ささやかな提案を試みたいと思います。最近は大学、学部学科、各種研究所の活動が拡大し、またそれに関わる予算的な裏付けも充実してきており、それに反比例する形で学会の活動範囲が狭められているという印象があります。また学会は資産（機器備品）を保有してはならないという決定的な制約の中で、最近の会長はじめ、運営委員の先生方はよく活動されていると思います。そうした活動に対し心から感謝を申し上げます。

以下私どもが関わっていた時分の活動を思いつくままに記してみます。その当時学会は二つのテーマを掲げていました。一つは学会の、というより人文学研究所の、IT化、もう一つは外部への公開です。当時の学会

のキャッチコピーは「顔の見える人文学会」でした。

当時人文文学研究所には大学のネットワークにつながっているPCが一台しかありませんでした。また私の記憶違いでなければ、PCそのものが一台しかなかったかも知れません。そこで私どもはハービーラボ社の畑田明信氏（現人間科学部非常勤講師）の助言によって、研究所内にサーバーを設置し、ローカルエリアネットワークを構築しました。それによって同時に三台のPCでメールのやり取り等が可能となりました。これは当時の運営委員の先生方のご協力で出来たことですが、それまでにない新しい発想だったと思います。またそれと同時に学会のwebページを構築しました。研究所のwebページが出来たのはその後だったように思います。学会員の個人情報の掲載は私どもの後の委員会の時代だったかも知れません。いずれにしても今は大学のwebページや個人情報報告がようやく充実してきましたが、人文学会はそれに先んじていたと自負しています。

二つ目の外部への公開ですが、それはニューズレターの発行です。今は研究所のニューズレターが配信されていますが、もともとは学会が始めた活動です。私どもの委員会の4年間、月一回の発行で、A3版両面カラー刷りで全40号ほど発行しました。それは人文学会の活動が外部から見て分かりにくいのではないかという思いからでした。内容は委員会の議事録、講演会の情報、当時の出版物のデジタル化に絡む著作権講座、PC何でもQ&Aなどがあつたように思います。研究所のニューズレターは1年ほど遅かったと思います。残念ながら今は学会のニューズレターはありません。

それ以外に思いつくことは、ムービーシアターの構築（17-216室）、名誉会員の設置、意見箱の設置、看板の設置（これは研究所と同時でした）、ノートPCの貸出し、過去のすべての『人文研究』の論文題目のデ

デジタルアーカイブ化（関係者全員汗だくで取り組みました。関係された方々にこの紙面を借りて感謝申し上げます）、箱根での懇親会の開催などがあります。これらはすべてうまくいったわけではありませんが、ノートPCの貸出しでは恩恵を受けられた先生方もおられたのではないでしょうか。

物品については、学会は資産を保持してはいけないという決まりがあるためすべて研究所に寄贈という形をとりました。予算の縮小化もあり、『人文研究』を紙媒体から電子媒体に移行するという提案をしたところ、総会でかなりの議論の上否決されました。またフィールドワークを研究方法とする地理学の先生方の要望もあり、自動車を一台購入するという案も出されましたが（大学の理事の一人からは賛同を得たのですが）、車庫の問題もあり、またアルファ Romeo にしようという奇抜な声もあり、総会にかかる前に頓挫してしまいました。このように部分的にせよ人文学会の活動内容を人文学研究所あるいは大学が後を追うというような構造がありました。

上に述べましたように、現在の学会をめぐる状況はかなり厳しいものがあります。この状況を安定期と捉えて、現在の活動をルティーン化するというのも一つの選択肢だと思います。しかし私は学会にはもう一つの側面または使命があるように思います。それは大学の「先鞭をつける」というものです。学会でまず「先鞭をつけ」または「実験的にやってみて」、その後大学の諸機関に引き継がれる、そういう活動があってもいいように思います。

『人文研究』の実験的な電子ジャーナル化などはその一つです。当面は紙媒体と併存させなければならぬかも知れませんが、電子媒体の方は月1の割合で発行する、というのはいかがでしょうか。学生部会の活動を

拡大し、院生を含めた「賞」を設置する。その受賞は履歴書に記載しても恥ずかしくないような、ネーミングを含めて権威あるものとすることも考えられます。文芸以外の点で活躍した学生（人科生・外語生）（スポーツ、資格、成績優秀者、ボランティア等）を顕彰する。オリンピック級のことは大学に任せるとして、小さなしかし立派なことを成し遂げた学生を見逃さずに顕彰し、他の学生の励みとすることもありでしょうか。これは人間科学部でずいぶん前から提案しているのですが、いまだ実現していない案件です。いろいろ勝手なことを書き連ねましたが、最後に人文学会の今後のさらなる発展をお祈りします。